

# 生産経済社会についての一考察

長谷川博\*

A Study on Production Economy

HASEGAWA Hiroshi\*

In this paper, I look at the production economy throughout history: namely, from the era of acquisition economy, to agricultural economy, and to industrial economy. In Japan, each type of economy became very rich at the end of the respective transition period. Therefore, the transition was delayed, or Japan did not have to do new things. This doesn't mean Japan was primitive but was actually advanced. It was at that time that foreign countries introduced a new axis. If they were successful, Japan would be primitive. What had happened in the background? I would like to think about the post production economy by considering it.

キーワード: 生産経済社会, 獲得経済社会, 農業社会, 工業社会, 信用社会

## 1. はじめに

拙稿において、今日の日本産業発展の背景として、かつて先人が築いてきた日本的な勤勉精神の倫理<sup>1</sup>と日本の資本主義の精神<sup>2</sup>について考察を試みてきた。すなわち、今日の日本産業発展の背景には、日本人があたりまえに育ててきた倫理観があり、それに基づく独特の勤労観があることを述べた。

日本以外の文化圏、特に一神教の下では、労働はもっぱら奴隷が担当し、労働は蔑まれていた。そして時代が進み、世界的にも奴隷制度の廃止や変質とともに労働が奴隷でない人々も行うようになるにしたがって、働くことの意味も変化してきた。世界的に、働くことが労働として位置付けられるようになるのは近代以降のことである。対して日本では、古来から、一神教から発生した奴隷制度とは無縁であり、人間の上に神はいないし、人間の下に奴隷もいない。神との契約もない。どこまでも対等な人間が中心であった。身分の上下を問わず、働くことそれ自体に価値を見出してきた。

日本神話の最高神、天照大神は熱心に機織りをしていた。神様が汗を流して働いているのである。現代でも皇居には天皇陛下が稲を栽培する水田があり、天

皇陛下自ら田植えや稲刈りをなさる。君主を仰ぐ国家は多いが、自ら水田に入り稲を育てる君主はない。

マックス・ヴェーバーは、近代資本主義の精神と呼んだ敬虔なプロテスタントの世俗内禁欲の行動様式キリスト教と資本主義の親和性について述べているが、日本には、ヴェーバーより3世紀も早く、鈴木正三、石田梅岩といった思想家が、それぞれの職業に励む行為が宗教的行為に矛盾しないといった、天職観念、世俗内禁欲、利潤追求行為を正統化し、日本資本主義の精神的基礎を提示した。

日本産業の強みの源泉はここに見ることができるのではないかという視点から、さらに人類の先史にまでさかのぼり、そこから現代までの日本の経済社会を、大きな歴史の流れとして俯瞰することによって認識し、今後のあり方を考える手がかりになるよう考察を進めたい。

## 2. 獲得経済社会と生産経済社会

世界史では、獲得経済とは、自然界にある動植物をそのまま狩猟採集(採取)して、それを人間の食糧として生活を営む経済の段階のことであり、生産経済とは自然界にある動植物に人為的に手を加えて養育・栽培し、それを人間の食糧として生活を営む経済のこと

\* 国際ビジネス学科  
e-mail: hasegawa@nc-toyama.ac.jp

で、具体的には農耕や牧畜という活動であるとしている。もちろんそれ以降の道具や織物などの手工業生産や機械生産、製造業も広い意味で生産経済である。さらに、その区別の仕方は大きく分けて、打製石器による旧石器時代が獲得経済の時代(狩猟、漁労、採集)とし、磨製石器による新石器時代が生産経済の時代(牧畜、農耕)とされている<sup>3</sup>。

磨製石器とは、石を打ち砕いた破片をそのまま利用した打製石器と違い、刃を鋭くするために磨き上げられていて、極めて鋭利で耐久性の高い石器のことである。つまり、人の手によって加工が施されているという意味で、人類最古の道具といえる。そんな磨製石器の世界最古のものが日本で発見されている。昭和24年(1949年)のことである。群馬県の赤城山麓で「槍先型尖頭器」が発掘され、調査の結果3万年前につくられたことがわかった。それ以降日本では、関東・中部地方を中心に多数発見されているが、海外ではオーストラリアで2万5千年前、ロシアで1万4千年前～2万年前のものなどがあるが、いずれも人が石を磨いて作ったというより、はじめからその形になっている自然石を利用したものである。

日本の加工技術は、なんと3万年の歴史がある。技術大国日本を象徴したような話だ。

自然人類学によると、今から200万年前に人類は猿人から分化し、15万年前の現世人類が誕生したとされている。ミトコンドリア・イブの解析では、15万年前の人類の始祖はアフリカ中央部にいて、その人類が、5万年前に世界に散り、3万年前に地球の気温が低下したことにあわせて、バイカル湖辺りにいたモンゴロイドが南下して日本人になったといわれている。つまり、日本に人が住み始めたのは今から3万年前で、ちょうどその3万年前の世界最古の磨製石器が日本で出土しているのはつじつまが合う。

法隆寺の五重塔は、今から1300年ほど前に建てられた世界最古の木造建築物だ。建物を支える重要な部分には釘を使わず、木組みといって木自体に切り込みを施し、はめ合わせていく技術が用いられ、その接合部が地震の揺れを吸収する仕組みになっている。また、木造軸組工法で、塔の中心を貫く巨大な心柱は、どの層とも釘などでつながれていない特殊な構造が、

長年にわたって地震や台風などの天災から建物を守ってきた。

そしてこれらの主要な部分は、ほとんど「槍カンナ」と呼ばれる先の尖ったノミのような道具1本で加工が施されているのだ。槍カンナはもちろん鉄製だが、その形状は磨製石器の槍先型尖頭器と瓜二つだ。このような日本古来の技術は、少なくとも3万年の歴史があり、それは、日本の木材の加工技術や木や森そのものを大切にする文化が、それと同じ期間しっかりと培われてきているということであらわしている。

五重塔のような仏舎利塔は、大陸や朝鮮にもあるが、すべて1層ごとに積み重ねただけの構造で、造り方がまるで違っていて、明らかに日本のオリジナルな技術であり、こうした高度で複雑な技術は、突然降ってわいたように生まれるものではない。つまり、世界最古の磨製石器が出土し、かつ先の尖った道具1本でさまざまな木工技術を開発した日本は、はるか大昔から「技術国家」であるということである。そして、もうひとつ付け加えるならば、世界には4000年以上前から文明を築いてきた国がいくつかあるが、その中で砂漠化していないのは、日本だけだ。日本は木の文化でありながら森を大事に育ててきた。つまり、自然との共生をしてきた民族でもある。そして技術に関しては3万年の歴史を持つ国なのである<sup>4</sup>。

しかし、縄文時代の日本は、土器・磨製石器を使用したものの、牧畜は行われず、水稻農業による本格的な農耕が始まるのは弥生時代になってからで、それまでは粟やイモ・マメ類、陸稲など一部の栽培農業のみを行っていたとされているため、教科書では、後れた文明とされている。

### 3. 日本における背景

#### 3.1 恵まれていた日本

縄文時代の日本は大変豊かだった。農業化以前の採集経済としては、世界で最高に豊かな生活をしていたらしく、生活用具も豊富で芸術的にも高度なものが遺跡から出てくる。

経済学の発展段階説でいうと、日本人は遅れていて、採集経済を長くやっていたことになるが、生活の必

要から考えれば、苦しい農業などしなくても充分食えるのなら、採集経済と半栽培農業(里芋、葛などの根菜類)のままでいてどこが悪い、ということになる。

なにしろ日本列島は、海の幸にも山の幸にも恵まれている。そのうえ緯度が中緯度なので、冬の幸も夏の幸もある。暖流と寒流が交替でやってくるので、漁業も気候も居ながらにして2種類が楽しめるところはちょっと他に類がない。具体的に言えば関東平野などは、南方系の山の幸であるドングリと北方系の海の幸である鮭の両方がとれる。ドングリはそのまま水にさらして食べられるし、ドングリがあるところはそれを食糧とする猪がいる。したがってわざわざ苦しい農業をしなくても、ハンティングとフィッシングで楽しい毎日というのが縄文時代の日本人だったらいい。

その結果、国家組織を持たなかったのも、農耕民族が大陸から農耕技術と国家行政制度の2つを携えて渡来すると、容易にそれに組み込まれてしまった。しかし、そこで農業時代に移行してしまうと、それから先がまた素晴らしい。

農業を徹底的に研究して磨き上げて、1000年後には世界最高の農業国になってしまう。江戸時代に日本へやってきたポルトガル人やオランダ人は、鉄砲と火薬以外については、日本があまりにも豊かで立派なことに驚いてしまう。

逆に日本人の方は、彼らの海外へ雄飛しようという熱意と技術には感心したが、その他についてはむしろあきれている。たとえばキリスト教の教理が幼稚なこと、彼らの都市が不潔なこと、奴隷を使うこと等々。

実際1人当たりGDPでみて、江戸時代の日本は世界最高ではなかったかと思われる。イギリスの学者で日英のGDP推計の比較を行った結果、明治時代に入っても明治10年ぐらいまでは、日本の方が1人あたりGDPでイギリスより高かったという人がいる。日本は蒸気機関車や工場はなくても、水車と農業だけでそれだけの生活水準を独力で実現していたのである。

とすれば、こういうことが言える。

日本は農業への移行が遅かったが、移行してからは世界最高の農業国をつくった。それからもう一つ。あまり立派な農業国になったので、工業国への転換が遅れた。言い換えれば、公害と重労働をとまなう工業

などしなくてすむほど立派に農業を仕上げた。なるほど江戸時代が長くつづいたはずである。

だが、ここでも武力侵入という外圧が働く。縄文から弥生への移行に際しては、農業集団がもっている食糧備蓄力と集団農業経営からくる組織力と鉄の製造力が強大な武力になって、縄文時代を滅ぼした。それと同様、農業から工業への移行に際しては、アメリカの大砲や軍艦がものをいった。

そこで日本は、インドや中国が植民地化された先例を教訓とし、工業化を行って欧米の武力侵入を防止した。それから200年。工業化を始めたのは50年遅かったが、日本は今や世界最高の工業国になった<sup>5</sup>。

東洋学研究者で知日家の米国人女性ヘレン・ミアーズが、1920年代から日米が開戦する直前まで2度にわたって中国と日本を訪れ、その著書の中で次のように述べている。

日本人は2000年もの間、小さな島に住んでいた。保守と勤儉を主たる徳目とし、土地を肥沃に保ってきた優れた園芸家だった。しかし、人口が3,300万程度の時代でさえ、彼らは生きるのがやつの土地しかなかった。新しい鉄道、機械、工作機械のために鉄や鋼鉄を、銃のために金属を輸入しなければならなかった。軍艦は高価だった。新政府は高くついた。不満を抱く旧貴族階級には補償が必要だった。それに加えて、あらゆる分野で物心両面の改革が急がれていた。

昔の日本は中国から工人、学者、僧侶を招いて、新しい製造技術、新しい社会と政治の運営方法、人間と自然と宇宙の関係についての新思想などを教えてもらった。留学生を送って、新しい知識を学ばせ、もち帰らせた。産業革命と機械文明以前の日本は、必要に応じて外部世界との関係を断ち切ることを選び、導入した技術と思想を時間をかけて消化し、自分たちの気質と環境に適応させていくことができた。

しかし、19世紀後半になると、もはや外界と隔絶することも、時間をかけていることもできなくなった。日本人は妥協を許さない欧米人を締め出すことができなかった。欧米は自信をもっていた。科学と機械力で自信をつけた欧米人は、自分たちはアジア人やその他の「後れた」人種より本質的に優れていると確信して植民地に対していた。欧米の行動様式は欧米人が「正しい」

と認めたものであり、それ以外の行動様式は「間違い」だった。欧米に順応すれば「進歩」であり、順応できなければ「反動」とされた。

このように、日本の新しい指導者たちは、きわめて危険な状況のもとで、新しい文明をつくり始めたのである。日本には2つの選択肢しか与えられていなかった。1つは、欧米の要求にこたえて、手工業と農業中心の経済から輸出型の工業偏重経済に移行することだった。同時に近代的軍事機構を確立し、極東における欧米の力の均衡政策に貢献する欧米型国家になることだった。もう1つの選択は、中国のような半植民地国家として留まるか、欧米のどこかの国の植民地になるか、であった。

日本の指導者たちが、欧米型国家になることを選択したのは当然である。そのためには、政治と経済の中央集権化が不可欠だった。政府は鉄道を建設し、工場、兵器庫、造船所をつくった。タバコを専売制にした。

日本はそれほど大きな国ではなかったが、それでも日本人は道路網と橋梁を効率的に整備してこなかった。明治まで、南北の藩を連絡していたのは、沿岸航行の帆船だった。新政府は交通手段の近代化に着手し、ひと握りの商家が台頭してくる。中でも三井家は前政権の商業規制にもかかわらず、たくみに資本を蓄積していた。商業と金融の分野で経験豊かな彼らは、革命資金を援助し、銀行制度をつくるのを助け、政府財政の構築を助け、産業の発展を助けた。

明治以前はさげすまれていた「商人と金貸し」が政府に協力して大企業になった。大企業と政府が手を携えて行動し、補完関係を築いていった<sup>6</sup>。

このように、外国人の目から客観的に見ても、同様の認識がなされている。

### 3.2 ものづくりと農本主義

元駐ウクライナ大使の馬淵睦夫は、日本産業の強みの源泉について以下のように論じている。農業こそが日本の産業の基本なのだ。農本主義、あるいは生産経済主義といってもいいが、日本では「生産」が最も重要なファクターだ。その生産の基礎にあったのが「農業」だ。農業生産が国の根幹であるという思想があっ

たからこそ、日本の製造業も発展することができた。同じように、商業もサービス業も発展することができた。言い方を変えれば、稲作の精神と、製品を作る精神と、商品を売る精神が、みな同じだった。この農業生産を支えたものは「村落共同体」だった。「天つ罪」という言葉がある。私たち日本人が犯してはならない罪は何かというと、「稲作の邪魔をすること」だった。「畔を潰す」「田に水を引かせない」などのことを「天つ罪」と言った。これら農耕を妨害する行為が一番大きな罪と言われてきた。これが日本人の倫理観のもと、企業倫理のもとになった。ひと言で言うなら「人様に迷惑をかけない」、つまり「共同体の規則を大切にすること」である<sup>7</sup>。

馬淵は、日本産業の発展の背景には、農業生産にあるとし、それを農本主義と表現した。しかし、この農本主義という用語はかつて厳しい批判の対象とされてきた歴史を持っている。すなわち、農本主義が、天皇制の体制擁護ないしはそれへの親近性をもって、ファシズムの温床をなしてきた、非資本主義的で、半封建的な色彩をもつ、家族主義的小農経営を擁護する理論である、農の美化は日本の国がらについての美化<sup>8</sup> などして批判されていたとされてきたのだ。

宇沢弘文は、「新農本主義を求めて」と題し、次のように述べている。農の営みは、人類の歴史とともに古く、人類を特徴づけるものとして意味づけが存在するものであり、自然のもつ論理にしたがって、自然と共存しながら、それに人工的改変を加えて、食糧の生産おこなうわけであるが、工業部門とは異なって、大規模な自然破壊をおこなうことなく、自然に生存する生物との直接的な関わりを通じて、このような生産がなされるという点に、農業の基本的特徴を見いだすことができる。とし、農業が、工業のような市場効率性になじまない主要因は、自然的条件の予期せざる変動にもとづくものか、投機的な要因にもとづく農産物の市場価格の異常な変動、あるいは政策的な要因にもとづく、農業における生産条件の攪乱であり、むしろ外生的な要因に起因しているとし、そのことよりも、農業部門で働く人々は、現代資本主義制度のもと、しばしば工業部門においてもたらされる自己疎外感を持つことなく、自らの人格的同一性を維持しながら自然のなかで自由に生きることができる<sup>9</sup>、という点を積極的に評価している。

反グローバリズムの思潮のなかで、農本の本質的理論が、再評価されている<sup>10</sup>、ものと思われる。

カナダ人外交官で歴史研究者であり、GHQの通訳として、昭和天皇とマッカーサーの通訳も担当したハーバート・ノーマンが、「忘れられた思想家」と評し、江戸時代中期を生きた医師・思想家であった安藤昌益(1703-1762)は、自然の恵みに浴して食物の生産にこそしむ農民を尊敬し、「農は宝」、「国の基」として尊重するだけでなく、社会思想をまず農民階級を基にして立て、そこから、農民の生産物の大半を収奪する貪欲で怠惰な階級をすべて攻撃したのである。昌益は農耕に従事する者を「直耕の真人」と呼んでいるのは、封建社会において本当に社会の基礎であった農民だけが真の意味の人間であると説いて、その権利を擁護する立場を採った<sup>11</sup>。

ハーバート・ノーマンの関心は、数百年の封建時代が日本にはあったのであるから、その間に専制権力と抑圧に対する反抗を擁護するような思想が何かなかったかという点であったが、それが、あまりにも少ないことに失望した。昌益は、生産的勤労と個人の権利の尊敬すべきことを教え、農本民主主義思想を打ち立てた。産業時代がまだ現れなかった時代に、いつかは真に文明社会に受け入れられるだろうということを見透かしていたとしている。

### 3.3 信用社会

例えば、「他人のものを盗んではいけない」というルールを決めることによって、自分の持ち物についての安定性を確保する、という「コンベンション」が存在する。これによって、他人の財産を認めるという、コンベンションが働くことになる。コンベンションというのは、英語を訳す際に常に引かかる言葉で、日本では大槻春彦先生が「黙約」と訳しているが、「習慣」あるいは「習慣的英知」と訳している例もある。「約束」と「習慣」の両方にまたがっているのが、コンベンションの特色だ<sup>12</sup>。

倫理の黄金律というものがある。これは、洋の東西を問わず、人類共通の価値観として、宗教や文化を超えた道徳の基礎となっているので普遍性がある。

「自分にしてもらいたくないことは人に対してするな」というよく知られた言葉がある。これは、古代中国にお

ける孔子のほか、古代ギリシャ、古代ユダヤ教などでもみられたものであり、歴史的には古代からみられ、そして洋の東西を問わず知られた倫理命題になっている。

その表現を肯定型にした場合の「自分にしてもらいたいように人に対してせよ」という格言は、キリスト教の聖書(新約聖書「マタイによる福音書」7章12節)に登場する。ここでは、禁止型のルール(他の人に対してするな)が積極型のルール(他の人に対してせよ)に転換されている。すなわち、他人を傷つけるような否定的行為を慎めという基準から一転、他人に対して利益をもたらす積極的な行動の必要性が説かれている。以後これが普遍性の高い行動基準として黄金律(Golden Rule)として広く知られるに至っている。

黄金律は、人類が共通に直感的に受け入れる要素を持つ一方、その基礎には相手の共感を得て相手に何かを与えることを意味しているのので、そこには利他主義の要素がある<sup>13</sup>。

日本では古くからこのような要素を共有して、信用社会を成り立たせてきたといえる。

「お天道様が見ている」「働くことは当たり前あたりまえ」「みんな一緒にがんばる」「みんなで分けあう」「ご先祖さまのおかげ」「世間さまに恥ずかしくないように」「足るを知る」など、このような感覚が自然と染みついて、協力して働き、互いに信用しながら交換して、生活してきた。

青梅の上をずっと峠まで登っていくと、そこから先が甲斐の国。甲斐の国の産物と多摩地方の産物は違うから、江戸時代から物々交換をしていた。お互いに顔を見ないで交換をする。黙ってものを置いて帰る。やがて向こうが来て、置いてあるものを見て、このくらいわらびとかぜんまいが置いてあるのだから、このくらいの大根を置いておけばいいだろうと。それで続いていた。お互いに顔を見ない物々交換をずっとやっていたらしい。それが本当の信用だ。お地藏さまがその取引を黙って見ていた。

日本は、信用社会という前提で、近代法も含めて、欧米的なビジネスを受け入れた。明治維新以降、欧米的な契約社会を、日本的な信用社会とうまく融合してきた。だから日本は明治以降、独自の発展ができたと思っている。日本がもし、契約社会一本で来ていたら、

日本の富はすべて奪われていた<sup>14</sup>。

先史から現代までの経済社会の移り変わりを、俯瞰してきたが、ここまでをまとめると次のようになる。

日本列島はたいへん恵まれている。まず、気候、風土。それから外国の圧力がおよびにくいこと。

日本人は何でも仕上げが上手である。採集経済社会も農業社会も工業社会も、これまでいつも世界最高のものをつくってきた。3回も、である。

ただし、仕上げに凝って新しいものへの挑戦をしないから、転換期にはいつも一歩遅れる。

採集経済の時代は、日本では縄文時代とされているが、前述のように、豊かで恵まれていたため、たいへん長く続いた。歴史学的には、石器の使用による区分や定住が始まっていることなどの要件で区分されるが、日本以外では、狩猟採取時代は、食糧を求めて移動し、定住しないので、農業が始まってから定住するのに対し、縄文時代の日本は、狩猟採取が中心でありながら、定住がされていたとされる。さらに、移動する文化においては、その場所に先住者がいる可能性があり、移動のたびに争いが起こる。土地やそこにある食糧などの恵みを奪い合い、争いに勝った者がそれを根こそぎ得る、その意味でも獲得経済であったということである。日本の縄文時代は、定住しながら狩猟採取生活が持続できるほど豊かだったので、争う必要もなく、古くから、高度な技術による磨製石器を持ちながら、人を殺傷するための武器を持たなかったという。縄文人の流れをくんでいとされるアイヌにも、熊を狩る道具はあっても、人を殺す道具はないといわれる。

また、縄文という名が示すように、土器に装飾を施すなど文化的な面においても力を注ぐ余裕があるほど、豊かさ、多くの人がそれを持続できる知恵があったということがわかる。

現代においても、お互いに信頼し合う社会は、コストが安い。日本では、アメリカや他の国のように金持ちが自分の住まいのまわりにゲートをつくらなくてもいい。他の国では、自分の邸宅の周囲に堀をめぐらせて、武装したガードマンが立っている。金持ちはそうしないと安全が保てない。金持ちが住む場所は、町全体に堀をめぐらせ、住民以外がその地域に入ることを厳しく管理するゲーテッド・コミュニティが、アメリカには何百何

千とある。東南アジアや南米の途上国でも同様だ。そんな所に住むと不便である。日本は浴衣がけで、地下鉄に乗っていてもいい。そういう生活のクオリティを、日本人は全国民がエンジョイしているのに気づいていない<sup>15</sup>。

### 3.4 シラスとウシハク

古事記の国譲り神話は、わたしたちの国が、戦よりも話し合いで解決する精神や、敗れた側を皆殺しにしたりするのでではなく、その名誉を讃え、尊重するという日本的な心の教えとして紹介されることが多いのだが、もう一つの大切な教えがある。それが「シラス」と「ウシハク」である。

大国主神は、懸命に努力して自分を鍛え、大いなる国の主になった偉大な王ということだが、その名前から明らかなように、大国主神の治政は、施政者が国の主人となる、すなわち領土領民の主として君臨する、という統治形態であったと理解できる。「主人(うし)」が「佩く(はく=身に着ける、所有する)」、つまり所有者、支配者として領土領民の上に君臨する統治形態が「ウシハク」である。古代の西洋や東洋で行われていた統治形態そのものである。

ところが天照大神を筆頭とする高天原の神々は、大国主神のこの統治形態を完全否定してしまう。天上の神々は天の安河原で会議を開き、地上の統治を天上に委ねさせることに決定し、使いを出して、大国主神に国を譲るよう迫った。

「天照大御神・高木神の命もちて、使わせり。汝の<sup>うしは</sup>領ける<sup>あしほらのなかつくに</sup>葦原中国は我が御子の<sup>あ</sup>知らす<sup>み</sup>国ぞ、と言依<sup>ことよ</sup>さし賜<sup>たま</sup>ひき。」<sup>16</sup>(下線筆者)

古事記にあるこの記述は、天照大御神と高木神が、<sup>たかぎのみこと</sup>邇邇芸命に、この国はあなたが治める国であると仰せになったのであり、記述の中の「シラス」は「シラシメス」「シロシメス」「シメラフ」などと変化する。「シメラフ」を漢字で書くと「統めらふ」である。意味はまさに「知らす」で、情報の共有化のことである。つまり「知らせ」を聞いたみんなが情報を共有化し、互いに必要な役割を定め、みんなで一致団結、協力して国造りをするという考え方であり、その中心核が「シメラフ」存在、つまり「統めらみこと」となる。

例えば新田の開墾工事を行うとする。このとき主君が命令によって、民衆を強制的に使役して野山を開墾し、開いた田は主君のものとする。民衆は、自分たちが何のために駆り出されて労働をしているのか、まったく分からない。ただ、命令によって働かされているわけだ。これが「ウシハク」統治である。

これに対して、まずみんなで「新田を開拓しよう」という問題意識を共有化する。そのために、みんなで話し合っただけで役割分担を決め、一致団結、協力して、これを実現するのが「シラス」である。

大国主神は、「ウシハク」と「シラス」の違いを悟り、納得して、国を譲った。高天原の神々はこれを尊び、理解を示した大国主神のために、天にも届く壮大な神殿を建てて、その功績を讃えた。その神殿がかつての出雲大社本殿と言われている。直径 1メートルの柱を 3本、金属で結んで大きな柱とし、それを合計 9本建て、その上に建てられた本殿は、高さ 48メートルにもものぼる、巨大建築物であることがわかった。

皇后陛下は、平成 15 年に出雲大社を訪問された際、苦勞に苦勞を重ねて一代で築きあげた国を譲るなどということは、そう簡単にできることではないとぐいまれな御業である<sup>17</sup>と讃えた御歌を詠まれている。

日本の神々が太古の昔から大切にしてきた国の根幹をなす考え方がシラス国造りである。

19世紀までずっと「ウシハク」という統治形態しか知らなかった世界中の国々のなかで、唯一日本だけが、はるか太古の昔から「シラス」国を築いてきたのだ。

### 3.5 対等と平等

海外でヒットする日本のアニメやマンガに共通して、海外にない要素は何か。それは、日本人ならば当たり前持っている共通観念、それは「対等意識」である。どの作品にも主人公とその仲間たちが登場し、ひとりひとりに個性と特徴があり、異なっているが、対等な関係、横のつながりが根底にある。敵キャラには、ボスとその手下たち、つまり支配と隷属という縦の関係にある、このような共通のパターンがある。

「対等」とは、西欧思想や共産主義にみられる「平等」とは異なる。没个性的に、みんながただ一緒というのではない。対等意識は、相手と自分の違いを明確に

意識したうえで、互いに並ぶことができるようにしようとするものであり、日本人は、古くから「対等」を重んじてきた。

西欧圏では、「平等」も「対等」も、「equal」で、概念としての区別がない。そのため、西洋人には、日本という国が理解できなかった。なぜ日本が、満州や台湾や朝鮮で、あるいは南方諸国で現地の人たちを大切に扱うのか、どうして彼らに高い教育を施し、人として扱うのか、まるで理解不能だったようだ。

西欧では、人は神のもとで平等が建前だが、実際にはそれぞれに個性があり、生まれた時から不平等だ。個性と平等という二律背反の中で、支配者によって隷属させられてしまう西欧的フラストレーションに対し、日本アニメは、実に爽快な解消案を提示しているわけだ。すなわち、個性が仲間たちの役割分担にもちいられ、そして仲間たちは、皆、「対等」に付き合うという解答だ。その付き合い方が「和」である。

かつて、西欧や中国など多くの国において、支配者は神の名のもとに民衆に対する絶対的支配権を持った。支配者は神の代理人で、神と同じ権力を持つ。行政、立法、司法のすべての権力を握り、人の命さえも奪うことができる。だから、支配者の前では、将軍たちは奴隷だ。逆らえば命さえ奪われるからだ。その将軍の前では、兵たちは奴隷、その武装した兵たちの前で、民衆はやはり奴隷だ。支配する者は、支配される者に対して、ありとあらゆる収奪や暴行が許される。そして支配される者は支配される者に一切、抵抗することが許されない。こうして、社会の頂点から底辺までが、支配と隷属という関係によって構築されてきた。

これに対する民衆の抵抗が、18世紀の自由を求める市民革命となったが、現実には民主主義だ、自由主義だといいつつながら、実は社会の中に、支配と隷属という関係は色濃く残っている。また、神のもとに平等だと言いつつながら、かえって個性を圧迫されるという社会構造上のフラストレーションが、現実に存在している。

世界中の多くの国々が、支配と隷属という関係から抜け出せずに、長い歴史の中で四苦八苦しているなか、日本は少なくとも 7 世紀に、この問題をすっきりと解消してしまっている。それが「天皇と公民(皇民)」という概念だ。天皇は政治権力を持たず、それを行使す

る人、例えば太政大臣や将軍などの権力を認証する存在である。日本にも、社会の秩序を保つために、上下関係はある。しかしそれは、あくまでも役割分担の上下関係であって、支配と隷属の上下関係ではない。これが、日本社会の最大の特徴だったし、人々が共有する社会一般の概念でもあった。人々が天下の公民として、人としての尊厳をまず認めてもらっているから、安心して互いに個性を發揮し、互いに役割分担をしながら、よりよい社会を構築しようという社会風土が育成されてきた。それが日本だ。これこそ究極の民主主義である<sup>18</sup>。

第16代の仁徳天皇の「民のかまど」の故事を引くまでもなく、初代神武天皇以来、日本の天皇は国民を「おおみたから」と呼んで大事にしてきた。国民は搾取する対象ではなく、宝として大切にするという姿勢である。仁徳天皇はその姿勢で統治を行い、困窮者を救い、病者を慰問し、孤児や寡婦を扶助したと日本書紀にも書かれている。天皇は民を慈しみ、皇民は天皇を敬愛し、お互いに家族的な感情で結ばれることを理想としてきた。日本以外の国には見られない日本独自の伝統である。

### 3.6 二分法思考と情報共有

個性の發揮という点においても、一神教の下では、神に対する悪魔に表れる通り、明確に二分法思考が強い。特にアングロ・アメリカン社会では、正義と悪、支配と被支配、敵対的労使関係、等々あらゆるものを二分法で思考する。信ずる神は唯一無二であり、それ以外は邪教である。

それに対して、日本人は、絶対的な存在としての神ではなく、大地や自然現象などあらゆるところに神を感じ、そこからもたらされる恵みも災いも畏怖して、尊重しながら生きてきた。身の周りのあらゆるもの、動植物や人間、すでにこの世にない祖先達、路傍の石にまで神性を感じることができる。そのような暮らしには、二分法はなじまない。グレイゾーンや、第3の解があること、それ以上の無数の選択があることを、実感しながら生活してきたのである。

前述の安藤昌益は、二分法思考について、善悪、柔剛、堅弱の区別のように外面的現象のレベルにおい

ては二別されるようにみえるものであっても、その内面の性を見抜くならば、相互の中にそれぞれ反対物の性が内在しているのであり、両者の間には固定的な区別は存在しない、とし、儒教が、このような互性(相補性)についての認識を欠き、暗を去って明のみを採り、悪を去って善のみを採るといった偏った立場に立っており、その結果、厳格な道徳教に陥っていると攻撃する。

従来アングロ・アメリカン社会においては、労働組合と経営とは原理的に相対立すべきもの、したがって労使関係とは敵対的関係であり、両者が団体交渉の場において、その利害を戦わせた上で、妥協点に達した段階において労働協約を結ぶ。妥協不成立の場合は、組合はストライキ、経営側はロックアウトという戦術を相互にぶつけ合う。労使の主張を相互に明確に戦わせる方式こそが、オープンな健全な労使関係であるとする考え方が、アメリカのワグナー法、さらにタフト・ハートレー法の中にも明瞭に貫かれている。対立的感情が職場を支配しているために、自由な意思疎通、情報交流が阻止されてしまっており、多くの障害をもたらしている実態もみられるのである。このような敵対的労使関係そのものを見直さない限り、産業の国際競争力は強化されないという提言も行われ始めている<sup>19</sup>。

昔の日本では、12歳で小学校を卒業したら、男女ともにそのまま働きに出ることが多かった。そして雇う側は、ただ子供を働かせるのではなく、子供たちに教育を与え、手に職をつけさせ、十分な食事を出していた。そうした教育費や食費などは、全額会社負担であった。未成年を預かった会社が、書道や算術、算盤、地理、歴史、修身などを教えるということが、あたりまえに行われていた。

前述のヘレン・ミアーズは、1935年に大日本紡績の東京工場を視察した際、16歳の女工にヒアリングしており、それについて以下のように述べている。

工場内には、工場と寮の他に講堂、プール、売店があつて、必要なものはすべて工場内で間に合う。医務室もあり、医師、歯科医が常駐していた。作業の時間以外には、課業という勉強時間が設けられ、国語、算数、作文、地理、歴史、修身、体操、裁縫などを学んでいる。当時の日本女性にとって裁縫は必須であった。寮費も、食費も学費も全額会社負担で、給料の大部

分を実家に仕送りすることができた。今の感覚で言ってもかなり恵まれた条件だ。

そうした「人」を家族として大切に作る日本的経営が壊れたのが戦後のことだ。なぜ崩れたのか、その理由は簡単だ。家族同様の関係のなかに、労使の対決などといういびつな思想が入り込んで、労使の間にあった紐帯を切り裂いてしまったからだ。

社員は公民(皇民)であるのだから、陛下と親御さんからの大切な預かりものと思えばこそ、会社は社員を家族と思って大切に、教育や医療も施し、寮費や食費なども会社負担にしてきたのだ。それは、経営を考えたら大変な出費だ。会社も社員もひとつの大きな運命共同体であると考えていたからできたことである。

そうやって労使が一体となって社会のために頑張ってきたところに、歪んだ思想が入り込んで、労働者の権利が云々という仕事を放棄し、ストライキを繰り返し、仕事や会社の与えてくれる教育や衣食住に感謝するどころか、それ自体を対立の道具にさえする。そんなことが戦後の高度成長の間、ずっと続いたのだ。

労働者側が対立関係を望むのであれば、会社側は莫大な経費を使って社員に教育や衣食住を与える意味がない。与えれば、もっとよこせとデモをするからだ。会社としては、家族同様の関係をもはや切り捨てるしなくなる。

本来なら、貧しかった戦前よりも、日本全体が豊かになった戦後の方が、もっと職場環境はよくなっていたはずだ。企業内教育や企業の福利厚生も、もっとはるかに素晴らしい形に発展したことだろう。わがままを言って対立をあおり、そういう日本的相互信頼社会をぶち壊したのは、まさに戦後の歪んだイデオロギーだったと言えるのではないか。

また、日本的経営が崩壊したのは、国自体が外圧に屈し続けたという側面もある。談合入札や法的規制による参入障壁によって、企業側の利益が常に確保できる体制にあったものが、外圧に屈してそれを不法行為にし、規制を緩和して参入障壁を下げ、談合を排除して、ただの価格競争によることを国としてしまった。それで人件費の安い発展途上国の粗悪品が売れる。そういうものはすぐに壊れる。モノを大切に使うという日本古来の美風までも壊れてしまっている。

商業もまたしかり、大規模小売店舗法(旧大店法)が廃止され、全国に郊外型大型店ができた結果、駅前古い商店街は、全国津々浦々まで、みんなシャッター通りとなってしまった<sup>20</sup>。大型店が儲けたお金は、本社がある他の大都市に納税されるから、地方の中小都市は税収が減る。

戦前までの日本が持っていた良い面を、アメリカはことごとく潰しにかかった。占領下だけでなく、主権回復後も、日米構造協議とか年次改革要望書とかで、日本の経済システムを、ひとつひとつ壊していった。それまでしっかりと人間教育や給料を与えていた産業を崩壊させ、日本人の教育の機会を学校だけにし、その学校教育では、道徳や歴史を否定してきた。

#### 4. まとめ

これまで見てきたように、日本では、古代から、天皇以外の公民は皆対等で、身分制度がなかった。支配と隷属による社会では、情報の独占をおこなう。被支配者には、教育を与えず、情報を与えず、判断させない。そうすることで、身分を固定化する。日本以外の国の歴史、列強の植民地支配、すべてそれが基本になっている。日本は、そうでなかった。そのことにより、あらゆる産業が発展することができたといえる。

先の大戦においても、世界の中で、日本軍の兵は群を抜いて強かったとされる。日本が戦った白人国家の部隊は、最前線に立っている人間は、植民地から駆り出された有色人種や、傭兵が中心であったのに対し、支配と隷属に基づかない日本軍では、情報が共有され、末端の兵に至るまで戦争目的を理解していたため、士気が高く、軍規による統制のレベルが高く、そのために、戦闘においても強かったといわれている。

明治以降、日清、日露、第一次世界大戦に勝利し、大東亜戦争(第二次大戦)においても、緒戦の段階では勝利の連続であった。前述のように、スタートは遅れたものの、世界の中で日本は、工業化と組織化、そしてその先にあった戦争においても、その仕上げにいたる転換期までの過程では、とても強かったのである。

連合艦隊の主力戦艦大和、武蔵は、世界最高の戦艦だったが、進水したときはもう航空戦力の時代にな

っていた。ゼロ戦もそうである。プロペラ戦闘機としては出現当時はほぼ世界最高のものだったが、時代は間もなくジェット戦闘機に移ってしまった。

農業化でも、工業化でも、世界大戦でも、日本は仕上げで勝とうとし、事実勝てるから新しいことをしない。つまり、遅れているのではなく、その時は実は進んでいる。そうなると外国は、延長線上の闘いでは負けるから、新機軸を出す。それが成功すると突然、日本は遅れていることになる。

世界大戦をはさんで、なお工業社会の時代は続くが、工業社会の仕上げで日本は勝った。負けた外国、とくにアメリカは90年代に入ると、金融、情報、通信で画期的な新製品を出し、日米経済逆転が起きてしまう。今の日本は縄文時代末期の幸せや、江戸時代末期の幸せと同じ幸福を味わっている。

どういふ点が幸せかという点、もちろん世界で一番豊かなことである。長年やってきたことをその延長線上で続けているのだから、内部で人間関係の転換や逆転があまり起こらない。そのおかげで社会は安定する。これは逆に言えば、革命的成功とか成り金の出世は難しいということだが、その方向の捌け口は、芸術や学問の世界など社会システムの外に用意されるので、縄文時代や江戸時代の文化は、最高に凝ったものが完成した<sup>21</sup>。

大きな歴史を俯瞰して、獲得経済から生産経済社会としての農業経済へ移行し、さらに工業経済へと移行してきたことを確認したが、それぞれの移行期には、日本においても、外国においても、それぞれ歴史的に大きな出来事があった。特に日本は、太古から和を尊び、争いを避け、平和の中で繁栄を続けてきたが、なぜ戦うことになり、それは何をもたらしたのか。それらの評価についても議論の余地が多く残っている。さらにまた現在は、生産経済社会の後半の工業社会の末期を迎え、産業面では、機能重視の工業から、文化産業への移行、生産至上主義からの脱却が模索され、それは消費経済中心の社会とも言われる。産業や経済を消費を中心に見ても、その基は、グローバルな自由市場と金融資本主義の価値観である金銭的インセンティブに変わりなく、生産中心のサプライサイド・エコノミクスの域を超えない。早晩、次の社会へと移行していく

のであろうが、その社会とは何なのか。一つのヒントとして、脱産業化や非貨幣化、信用社会(convention)など、稿を改め、考察したいと考えている。

<sup>1</sup> 長谷川博「日本人の倫理と日本産業」富山高等専門学校紀要第2号, 2015, pp.11~20

<sup>2</sup> 長谷川博「日本の民主主義と資本主義の精神」富山高等専門学校紀要第3号, 2016, pp.1~10

<sup>3</sup> 木村靖二他著『詳説世界史』, 山川出版社, 2012, pp.10~12

<sup>4</sup> 小名木善行『ねずさんの昔も今もすごいぞ日本人!』, 彩雲出版, 2013, pp.12~18

<sup>5</sup> 日下公人『すぐに未来予測ができるようになる62の法則』, PHP 研究所, 2002, pp.212~215

<sup>6</sup> ヘレン・ミアーズ著, 伊藤延司訳『アメリカの鑑・日本』, 角川書店, 2005, pp.123~125

<sup>7</sup> 馬淵睦夫『和の国・日本の民主主義』, KK ベストセラーズ, 2016, pp.68~69

<sup>8</sup> 菅野正「農本主義について考える」, 村落社会研究3(1), 1996, pp.1~2

<sup>9</sup> 宇沢弘文『「豊かな社会」の貧しさ』, 岩波書店, 1989, pp.195~197

<sup>10</sup> 岩崎正弥「農本主義の社会哲学—地域づくりの視点から—」, 大阪経済大学『経済史研究9』, 2005, p.22

<sup>11</sup> ハーバート・ノーマン著, 大窪憲二編訳『ハーバート・ノーマン全集第3巻』, 岩波書店, 1977, pp.402~403

<sup>12</sup> 加藤尚武「第3章経済倫理学は「市場の暴走」を止められるか」, 稲盛和夫編『地球文明の危機』, 東洋経済新報社, 2010, p.67

<sup>13</sup> 岡部光明「自分にしてもらいたいように人に対してせよ—黄金律の生成と発展」, SFC ディスカッションペーパー2014-01, 2014, pp.17~18

<sup>14</sup> 日下公人・馬淵睦夫『ようやく「日本の世紀」がやってきた』, ワック, 2016, pp.136~139

<sup>15</sup> 同上書, pp.178~179

<sup>16</sup> 小名木善行『ねずさんの昔も今もすごいぞ日本人! 第二巻 —「和」と「結い」の心と対等意識』, 彩雲出版, 2014, p.246

<sup>17</sup> 同上書, pp.247~250

<sup>18</sup> 同上書, pp.2~10

<sup>19</sup> 奥田健二「安藤昌益から学ぶ未来の経営学」, 上智大学編集『ソフィア:西洋文化並に東西文化交流の研究』42巻3号, 1993, pp.488~489

<sup>20</sup> 小名木善行, 2014, 前掲書, pp.221~230

<sup>21</sup> 日下公人, 2002, 前掲書, pp.215~216